

WHA member File

世界遺産アカデミーのメンバーによる世界遺産との出会いと活動の様子を紹介します。

NO.162 行って、見て! 別の角度から百舌鳥・古市古墳群



仁徳天皇陵 百舌鳥耳原中陵 拝所

Personal Data

賛助会員 / 世界遺産検定 1 級
学生野球観戦、鉄道旅行が趣味の地方公務員

中村 慎太郎 (新潟県)

『百舌鳥・古市古墳群』の中でも、「仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)」という、殆どの方が巨大な前方後円墳のイメージをお持ちだと思います。私も、実際に行って、見るまでは、そうでした。甲子園で新潟県代表の野球の試合を観た後、あの巨大な前方後円墳を目指して最寄りの「百舌鳥駅」まで移動しました。頭の中で巨大な前方後円墳を描きながら向かって、見えてくるのは森、堀、公園、鳥居、駐車場。対象が巨大であるがゆえに、前方後円墳のイメージ画と地上からの景色では見え方が異なっているのです。実際に行って自分の目で見ることが、世界遺産の別の側面を知ることができました。

「別の角度」に関連した豆知識を、ふたつご紹介いたします。まずひとつめ、「百舌鳥駅」は、JRの中で唯一、読み仮名よりも漢字の方が多い

駅だと言われています。漢字は、通常、ひらがなが短縮表記されるものなのでレアですし、普段の生活の中でもあまり見かけません。ふたつめは、ゼネコンの(株)大林組が仁徳天皇陵古墳を建設する場合の計画を公表しています。古代工法を用いると、約15年8ヵ月をかけ、約680万人を動員し、総工費は約796億円もかかるそうです。単純比較はできませんが、仁徳天皇陵古墳の面積の約10分の1に相当する東京ドームは、約360億円でした。このように、世界遺産を様々な角度から見てみることも、私の楽しみのひとつです。

最後に、話は私の地元・新潟に移りますが、「佐渡島の金山」が日本26件目の世界遺産登録を目指しています。新潟県民として、待望の瞬間を心待ちにしています。皆さん、ぜひ佐渡島へおいでください。

NO.163 幾多の歴史を知るところ、ロワール渓谷



ブロワ城にあるフランソワ1世の螺旋階段

Personal Data

学生会員 / 世界遺産検定 1 級
九州大学大学院

木戸 真之 (福岡県)

百年戦争の英雄にして火刑に処されたジャンヌ・ダルク。彼女は、オルレアン包囲作戦で劣勢の中、フランスに見事最初の勝利をもたらした、「ラ・ピュセル・ドルレアン(オルレアンの乙女)」と呼ばれるようになった。私は学部生時代、この歴史的な戦いが行われた街、オルレアンに短期留学していた。

「ロワール渓谷」といえば、百年戦争の終結後、王侯貴族の居城が点在する地となったことで有名で、中でも、レオナルド・ダ・ヴィンチも設計に携わったとされている、フランソワ1世の築いたシャンボール城は、フランス・ルネサンス様式の最高傑作である。この地に来たら来訪必須の観光地だが、留学期間も半ば過ぎた頃、感染症拡大の影響で途中帰国することになり、シャンボール城にも、アンボワーズ城とシュノンソー城などにも行けずじまいだっ

た。この時ほど、“美味しいものは最後に食べる”自分の性格が嫌になったことはない。ただ唯一、ブロワ城には行くことができた。ブロワ城は、増築によって様々な建築様式が混在している点が特徴的である。城内は美術館になっており、国王達の寝室や三部会室、宮廷絵画などは、かなり見応えがあった。また、ルイ12世のシンボルであるヤマアラシや、フランソワ1世のシンボルであるサラマンダーの彫刻、アンリ3世(と4世)のイニシャルである「H」の装飾が各所に見られ、城内外どちらも楽しめる空間だった。

留学中、毎日ロワール川とジャンヌ・ダルク像を見ながら、トラム(路面電車)に乗って通学していたが、あの時間はオルレアン市民になれた気がして、今でも忘れられないものとなっている。

NO.164 夜明けのアッシジでの出来事



サン・フランチェスコ聖堂

Personal Data

賛助会員 / 世界遺産アカデミー認定講師
世界遺産検定マイスター
株式会社アラベルサービス 代表

榎 一彦 (神奈川県)

旅行会社の在籍時代、学生グループのヨーロッパ周遊旅行を案内していた時の話です。ツアー中はホテル滞在が続くわけですが、日程が進むといつの間にか、私の一人部屋が「1日の反省会」と勝手に称されて、学生たちの溜まり場となってしまいました。ツアー・コンダクターとしての業務日報を付けている横で、学生たちは毎晩、好き勝手にしゃべりまわって過ぎていたのです。昼も夜も賑やかな日々が連続し、長距離移動の疲れも溜まった頃。翌朝早く出発しなければならず、ホテルの初老スタッフに、「明日の朝、6時半に我々のグループにモーニングコールを入れてほしい」と申し出ました。すると、そのオジサマが、「この街では、そんなことをする必要はないよ」と。どういことかと訝しみ、半ば目覚ましのないことに不安を抱きつつ、いつの間にか寝込んでしましまし

た。翌朝6時、なんと街中に響きわたる鐘の音。とてつもない轟音なのですが耳障りな音でもなく、むしろ頭の中をスカッと心地好くさせるような音色が身体に染み込んできました。私も、夜更かしの学生たちも、全員起床。

——それが、イタリア、「アッシジのサン・フランチェスコ聖堂」での出来事です。

世界遺産として今、学び直すことで、あの時のオジサマの一言を思い出します。あの朝の聖堂の鐘の音が、世界遺産たる聖堂が社会生活の中での機能や役割を担っていることを、聖堂の壁に描かれた小鳥たちが囀るかのよう、再認識することができました。遺産そのものだけでなく、世界遺産の周辺に存在するあらゆるモノが、その地域にとって大切であり、語り継がれるべきモノ。今でも忘れることのできない、感動のワン・シーンでした。